

## 史談

2008 (H20) 10・20

## ■ 「暑さ寒さも彼岸まで」

暑い、暑いと口説いていたのもこの間のこと、日も短くなり、夜にはいると急に冷えてくるような気がするこのごろです。このへんでは八月のお盆が過ぎると急に涼しくなり、秋が急ぎ足でやってきます。さて、芸術の秋、食欲の秋、読書の秋、スポーツの秋などいろいろですが、今年はどんな秋にしますか。

## ■ 深山観音堂の屋根の葺き替えが順調に行われています。

吹き替えの工事は総額で約1千万円、その内85パーセントは国の補助とのこと。完成は11月末の予定です。お問い合わせは町の教育委員会まで。



(9月2日 撮影 江口)

この機会に、ぜひご覧ください。

## ■ 今年度の研究集会の後で・・・

11月の研究集会の終了後に、会費2千円での懇親会を予定しています。参加ご希望の方はお申し込みください。また余興として「出張・勝手に鑑定団」を行います。この機会に書画、骨董など、鑑定を希望される方は江口までご連絡ください。なんでも結構です。

## ■ 会誌『史談』への原稿について

史談会では今年度の会誌『史談』の原稿を募っています。長さはタイトル、写真を入れて6ページほど。内容は問いませんが都合で短くなる場合があります。原稿は原稿用紙でもフロッピーでもかまいません。早めにご用意ください。

## ■ この「会報」の原稿について

この会報は会員の情報交換の場であり、どんなでも利用、発表できる場所です。気軽にご利用ください。原稿の長さは800字ほど。内容は問いませんが、短くする場合があります。

封書は横田尻 1214 丸川宛。メールは [qqfk85vd@able.ocn.ne.jp](mailto:qqfk85vd@able.ocn.ne.jp) まで。

## ■ 身のまわりの草花や樹木にもっと心を・・・

私たちの周りにはたくさんの草花や樹木があります。しかしながら名前はおろか、その由来や性質、それらにまつわる事柄などにはほとんど無関心です。たとえば正月には松、桃の節句、桜の花見、五月の菖蒲など、数えればきりがありません。

春の桜だけでなく、もっといろいろな樹木に関心を持ちたいものです。たとえば横田尻の小林忠松さんの家には、目通りで120センチもあるサルスベリの木があり、毎年見事な花を咲かせています。この太さは置賜圏内でもトップクラスではないかと思われます。種類別の巨木リストがあったら更におもしろいでしょう。草花や鳥などの自然と人間との関わり方は、当然、短歌や俳句などの詩歌や絵画にもつながる大変に大きなテーマですが、それだけに種も尽きることがありません。

先ごろから「ウルシについて」いろいろ話を聞いてまわっていますが、近くにわかる人がいなくなってしまうました。たとえば町内で栽培している人、あるいは「ウルシ掻き」をしている人はいるのでしょうか。かつてやっていたという方も含めて、もしおられたら教えていただきたいのですが・・・。

## ■ 長井線荒砥駅の待合室

長井線荒砥駅の待合室のとなりに小さなギャラリーがあるのをご存知ですか。今、そこでは最上川の船運やツツガムシに関するパネル、さらには深山紙などについての資料や深山和紙で作られた人形が展示されています。ふだんはなかなか見る機会のないものばかりです。

近くを通った時に、寄ってみてください。

## ■ 蚕桑・鮎貝の文化財を訪ねて

去る9月26日、あいにくの天気でしたが、バスで高玉から横田尻、鮎貝と予定のコースをまわり、ふだんは見られない貴重な文化財を拝見させていただきました。

案内・講師役をお願いした平吹副会長には手作りの資料まで用意していただいたほか、それぞれの場所での説明もしていただきました。

高玉の大宝院跡では、大きなお大師様を見ましたが、この仏像に関する記事が先に古文書研究会から出された『鮎貝村長日誌を読む』の中の67ページに書かれています。



—鮎貝 常光寺の層塔の前で—  
(撮影・長沢)

## ■ ウルシかぶれ 2

今回は「ウルシにかぶれた時にどうしたか」ということと、ウルシ思っていた木が実は「ヌルデ」という「ウルシの仲間」の別の樹木だったことを書いた。

ところでこの「ヌルデ」という木は、最近では空地や畑の周囲などでやたらと目にする機

会の多い木で、しかもかぶれるせいか、大の嫌われものである。



上の写真は10月はじめごろのもの。ヌルデの枝先についている瘤のようなものは、できて間もない「五倍子—フシ」である。これはこの木に寄生するヌルデシロアブラムシという虫の巣でもあり、やがて中の虫が飛び立っていなくなると、乾燥して茶色になり硬くなる。それを採取してすりつぶした粉はタンニンを多く含み、かつてはお歯黒の材料として使われたほか、今も薬用、染色に広く使われているという。

木部の方はカツノキ（カチノキ）といい、武家ではその名にあやかって旗竿に用いたとか。一方で死者の杖として棺に入れたり、燃やすと音をたてることから祈祷の際の護摩木に使われ、霊木ともされてきた。そのせいか地方によってはノデッポウ、ノデボウ、ヌルデウルシ、フシノキなどと呼ばれた。

房状になる白い実は酢と塩気を帯びていることから、年配者の中にはこの木を「しょっぱい実の木」などいい、かつて実を口に含んだことがある人もおられるだろう。秋になるとウルシの葉が黄色くなって早く落ちるのに対して、ヌルデの葉は赤くなって遅くまで人の目を楽しませてくれる。 (川)

## ■ おくやみ

会員の青木邦夫さん（山口）が先ごろ亡くなりました。早くから山口の新地地区の成り立ちに興味を持ち、中心になって本にまとめられました。謹んでお悔やみ申し上げます。